

平和の同志

内田英一郎さんの思い出

溝口 正

内田さんが逝去されたのは、一九九九年十月一日であった。彼は憲法擁護浜松地区連合の結成当初からの生えぬきの会員で、職業は活字を拾って組む活版印刷屋さんであった。最も重要なことは、彼が遠州教会に所属するクリスチャンで、その平和運動の原点はイエス・キリストを信じる信仰にあったことである。いつの頃からか忘れたが、かなり早い時期から松本牧師、杉山憲示さんらと共に護憲の役員として活躍して下さったのであった。今から三四年前、すでに廃止されていた紀元節が「建国記念の日」と名を改めて法制化されたとき、私どもは「天皇中心の神の国」復活の意図を感じ取り、最初の建国記念の日の二月十一日に、反対のデモを行ったのであるが、その直感が杞憂でなかったことは、前首相の森発言で証明されたと言ってもよい。

そのデモから月一回の平和行進が始まったのであるが、当時の写真には、四十歳代の若々しい内田さんが『憲法を守る平和行進—市民の皆さん御参加下さい—』と書かれた横断幕の先端を持ち、後端を若い私が持って共に颯爽と歩いている姿は、いつ見ても「同志、内田英一郎さん」と呼びかけたくなる思いで胸が熱くなる。行進の初めの頃は、ビラは私が書いたガリ版刷りで、チャチなものであったが、間もなく内田さんが職業を生かして活版で印刷して下さるようになり、私の書く文章はともかく、ビラの出来ばえは一流になった。大体、一週間前位に原稿を書き上げて電話で知らせると、彼はポンを届けにきてくれたのであった。その速さ、その誠実さはピカイチであった。

私の家に来られると約三〇分位、お茶を飲みながら話して行かれるのが常であった。時には折りを共にすることもあった。口数は少なく、いつもにこにここと笑みをたたえていることが多かったが、時に日本の右傾化する姿を心配して「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」日本人の浅薄な国民性を嘆かれた言葉が記憶に鮮明である。

私の今日までの生涯の中で、内田さんから忘れがたいキリストにある友情を痛感させられたのは、私が「自治会と神社」の政教分離問題で、やむなく訴訟にまで発展したとき、彼は真っ先に原告となり共に戦うことを申し出て下さったことである。

「浜松市政教分離訴訟資料集」を開くと、原告団（松本牧師、酒井、内田、井原、守屋、杉山、大木、溝口の八名）の写真が第一頁に掲載されているが、最前列の私

の隣に、内田さんの笑みさえ浮かべた温和な顔がある。平和行進は、彼が七十歳を越えて高血圧症のためドクターストップがかかるまで皆勤賞であった。彼は、人前勇ましいことを言うことはなかったが、静かで温和でありながら、信頼のおける数少ない平和主義者であった。入院されたという報せをチラリと耳にしたが、あいにく多忙であったためお見舞いにも行けないでいるうちに、内田さんはさつさと旅立ってしまった。

平和への思いを長い間一つにしてきた同志を失って、私は言いようもなく淋しい。私もこの世に生かされる限り、平和憲法を守るため、戦い続けたいと願っているの

で、内田さん、天国から応援して下さい。いざれ積もる話を山ほどかかえて行きませうから待っていて下さい。

では、ひとまず、さようなら。又お会いする日まで……。